

パニッシャー (PUNISHER)

2004(平成16)年9月28日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★★



監督＝ジョナサン・ヘンズリー／出演＝トム・ジェーン／ジョン・トラボルタ／ウィル・パットン／サマンサ・マシス／ロイ・シャイダー／ローラ・ハリング／ジェームズ・カルピネロ／ベン・フォスター／ジョン・ピネット／レベッカ・ローミン＝ステイモス (ソニー・ピクチャーズエンタテインメント配給／2004年アメリカ映画／123分)

……妻子を惨殺された元FBI潜入捜査官が、「復讐の鬼」ではなく、法に代わって悪を処罰する「制裁者」^{パニッシャー}として大活躍！ 主演のジョン・トラボルタも存在感抜群で面白いアクションドラマだが、ラストはどこか虚しい……。

パニッシャーとは？

^{パニッシャー}
PUNISHERとは、直訳すれば「処罰する人」という意味で、この映画における主人公フランク・キャッスル (トム・ジェーン) の独白的な説明によれば、「復讐」ではなく、法が不備な場合に、法に代わって「悪人」を処罰するのであり、例外的に許されるのだそうだ。

しかし、悪 (犯罪) を処罰することができるのは、国家権力のみとされ、私人には禁止されるのが近代法の大原則。この映画は、この法の原則に反する「私刑執行人」を主人公として登場させた、ホントはアングラ (アンダー・グラウンド) な映画。果たして、この主人公による「私的処刑」「私的処罰」はどのような状況下において、どこまで許されるのだろうか？

FBI 潜入捜査官のお仕事は大変！

この映画の主人公フランクはFBIの潜入捜査官。FBIの身分を隠して麻薬取引を行う「悪の組織」の中に入りこんで情報を集め、チャンスを見計らって一気にこれを壊滅させるというのがその任務だから、そりゃ大変な仕事。自分の身の危険のみならず家族にも危険が及ぶことがある。また、その身分を隠すために、身

元を偽ったり住所を移転したり家族にとっても迷惑なこと、この上ない。

この映画の冒頭シーンは実に面白い。いきなり緊張感のある麻薬取引の現場からスタートだ。関係者(?)たちが「取引成立」と思ったとたん、現場を捜査員達に取り囲まれてしまった。そんな中、抵抗を試みた「関係者」の1人は、拳銃で撃たれて死亡。そのため、取引の相手方も混乱し、捜査員達のマシンガンが火を噴いた。このため現場には死体の山が……。ところが、車で運ばれてきた死体のうちの1体は、カバーを開けられるや、ガバッと起き出して……。こりゃ、一体何だ！これが、FBI潜入捜査官のハードな仕事というわけだ。

そんな5年がかりの仕事が無事(?)成功裡に完了したフランクは、久しぶりに妻子や両親たちとともにプエルトリコの海辺で休暇を楽しんでいたが……？

悪玉の存在感は抜群！

悪玉のボスは、ハワード・セイント(ジョン・トラボルタ)。『フェイス/オフ』(97年)、『ソードフィッシュ』(01年)以降、悪役を演ずるジョン・トラボルタの存在感は抜群で、その役柄は固定してきた感がある。そしてこの映画では、セイントは、裏社会を支配する悪玉でありながら、表社会でも公然と活動し、生きている人物。彼が愛するものは何よりも金だが、それ以外にも、妻リヴィア・セイント(ローラ・ハリング)を愛し、2人の子供ボビー・セイント(ジェームズ・カルピネロ)とジョン・セイント(ジェームズ・カルピネロ)を愛していた。ボビーとジョンは既に成人しており、ハワードの裏社会での仕事を手伝っているのだから、その母親のリヴィアは「いい年」になっているはずだが、この映画の中では、これが若くて美人。そして、ハワードが最も愛している女性とのこと。

また、ハワードは裏社会のボスだから、正妻(?)とは別に若くて美しい2号さん、3号さんがいてもよさそうなものだが、そうではない。この映画は、第1にFBI潜入捜査官のフランクによってハワードの愛する息子ボビーの命が奪われ、第2にその復讐のためにハワードが組織をあげてフランクの愛する妻子や両親を殺害し、第3に「パニッシャー」となったフランクがハワードの組織や家族、そしてハワード自身を処罰するというのがメインストーリーだから、フランクもハワードもあまりその家族関係がややこしくなるとマズイのかも……。このように

フランクもハワードも妻想い、息子想いの愛すべき夫、愛すべき父親でなければダメという前提があるから、フランクの家族もシンプルにしたのかも……。

面白い3人の住人のキャラクター

打ちのめされすべてを失ったフランクが、「復讐のため」、おっとそうではない「パニッシャーとしての任務の遂行のため」、1人アパートに入り車を整備し武器を準備していくシーンは、ちょっと現実味は薄いものの結構迫力がある。

そんな中で登場するのが、同じアパートに住むちょっとマンガ的な男、ダイブ（ベン・フォスター）とバンボ（ジョン・ピネット）、そして1人の美しい女性ジョアン（レベッカ・ローミン＝ステイモス）。ダイブもバンボも世の中の主流から外れて、孤独な生活をしている男だが、次第にフランクとの間に心の交流が始まり友情が生まれてくる。またジョアンも、つきまってくる男をフランクが撃退してくれたことがきっかけとなって、「ある種」の感情が……。

しかしそんな3人も、フランクの部屋がハワードの部下によって襲われると、必然的にその巻き添えを食うことに。痛めつけられて、ジョアンと2人で身を隠しているフランクの居場所を言え、と迫るハワードの片腕のクエンティン・グラス（ウィル・パットン）に対して、あくまで「知らない」と答えるダイブ。そのためダイブは何とも恐ろしい拷問を受ける羽目に……。

ダイブは単なるフランクの隣人にすぎない。したがって、何のために拷問を受けてまで、それに耐えなければならないのか……？ しかしダイブは、その拷問に耐えて、「居場所は知らない」と言い続けた。それはなぜか？ ダイブの言葉によると、それは「あんたは俺たちと同じ人間だから」ということ。この言葉には、大きな真実が含まれている……。

そして、映画の大筋とは関係ないものの、このエピソードはフランクの人間性を示すスパイスとしてとてもよく効いていると私は思う。

やはりトップは孤独？

どこの世界でもトップは孤独なもの。去る2004年9月27日、内閣改造と自民党役員人事を「断行」した小泉純一郎総理・総裁も、孤独だからこそ、「1人ホッ

とした時、話をしながら酒を飲み交わす相談相手」である、盟友の山崎拓前衆議院議員を首相補佐官に任命したわけだ。衆議院議員選挙に落選した山崎拓氏を首相補佐官に任命して、官邸機能の強化にあてることについては、当然賛否両論がある。つまり、そんな私的な感情で首相補佐官を選任するのは、民主主義のルールに違反するという「形式論」と、総理・総裁だって人間なんだから、そういう面も必要だという「実質論」との対立だ。私はアメリカ大統領制における大統領補佐官制度を前提として、『13デイズ』（00年）の中で描かれた1962年のキューバ危機に対処するケネディ大統領とそのスタッフたちの姿等を見ていると、大統領が本当に信頼できる人間を補佐官に選任するのは、当然だと思うのだが……。

それはともかく、この映画における悪の主人公フランクも、すべての権力を1人で握っているものの、やっぱり孤独だった……。

ハワードの右腕と最愛の妻

ハワードの右腕として、仕事上全幅の信頼を受けていたのは会計士のクエンティン。会計士という有資格者だから経理担当の参謀役かと思っていると、そうではない。彼は「武闘派」のトップで、自らマシンガンをもって現場へ赴くし、フランクのアパートへ乗りこんだ際は、自らダイブを尋問し拷問までやってのける人物。そりゃ、ハワードの信頼も厚いはずだ。他方ハワードは、最愛の妻リヴィアにメロメロだが、当然男としての「嫉妬心」を持っている。だから、美しい妻のリヴィアに誰かがちょっとでも「色目」を向けてくると、すぐにそれを察して、その男を「抹殺」してしまうことのくり返しだったようだ……？

たった1人パニッシャーとしてハワードの悪の組織に立ち向かうフランクは、さすが元 FBI 潜入捜査員。腕が立つばかりではなく頭もシャープ。フランクは、このハワードの嫉妬心にターゲットを定め、あたかもクエンティンとリヴィアが密会を重ねているような状況をつくり出し、その情報を小出しにハワードの元へ……。ままとこの策略にはまったハワードは、クエンティンとリヴィアが不貞行為を働いていると信じ込み、自らの手で右腕のクエンティンと最愛の妻リヴィアを殺してしまうことに……。

何とも見事なフランクの策略だ。諸葛孔明の策でいえば、果たしてこれは何と

名づけられるのだろうか？

わかりやすく楽しい、こんな映画大好き！

この映画の基本ストーリーは「復讐物語」だが、その筋立ては実によくできている。善玉と悪玉がハッキリしているし、ストーリー展開に無理がなく、フランクとワードの行動パターンもなるほどと納得できるものが多い。そして、フランクのアパートでの3人の住人とのエピソードも面白い。またアクションも、銃撃戦から、フランクとプロレスラーまがいの大男との格闘、そしてカーチェイスから西部劇ばりの早撃ち合戦まで、いろいろあって面白い。こんなわかりやすく楽しい映画、私は大好き！

ラストはちょっと……？

フランクは防弾チョッキを身につけ、武器爆弾等、準備万端を整えて、1人ワードの本拠地に向かった。そして、計算どおりの大活躍で、ワードの一味を全滅。その手際の良さはパーフェクトで、芸術的ともいえるほど。しかし、その後はちょっと……。

私が思うに、これが本当にパニッシャーとしての任務遂行であれば、任務遂行の達成感と満足感だけが残り、何らの問題もないはず。しかし、妻子や両親を奪われたことに対する復讐であれば、その目的を達成しても、目的達成感だけではなく、虚無感、孤独感がつのってくるはず。そして、現にこの映画でも……。

大願成就(?)の後、フランクは1人アパートの部屋の中でウイスキーをあおりながら、ピストルの銃口を自分の喉元にあて、指は今にもそのひきがねを……。しかし、結果的にそれは思いとどまって中止。

そして最後は、家族そろった幸せな時代に息子からプレゼントされたドクロ柄のTシャツを着たフランクが登場して、何ともバカバカしいラストシーンに……。この終わり方にはちょっと失望。こうなるとやっぱり、所詮アメリカンコミックの人気シリーズ映画化の限界かと思ってしまった。いい出来の映画だっただけに、このラストにはちょっと失望……。

2004(平成16)年9月29日記